

扁桃の特徴と扁桃に起こる症状

監修：笠井耳鼻咽喉科クリニック 自由が丘診療室 院長 笠井 創 先生

扁桃の特徴と役割

扁桃は、口の奥、喉の入り口の左右にある、こぶのような部分です。扁桃（アーモンド）の果実と形が似ていることから、この名がつけられました。扁桃は消化管の起始部にあり、以前は扁桃も酵素を分泌すると考えられていたため、よく「扁桃腺」と呼ばれていました。現在ではあまりその説は重視されなくなり、「扁桃腺」の「腺」を除き、簡単に「扁桃」と呼ぶか、あるいは「口蓋扁桃」という正式名称で呼ばれるのが普通です。

扁桃は咽頭の粘膜内に発達したリンパ組織の集合体で、口蓋扁桃、咽頭扁桃、耳管扁桃、舌扁桃、咽頭側索および咽頭後壁のリンパ小節が、咽頭部を輪状にとり囲んでワルダイエル扁桃輪を形成しています。

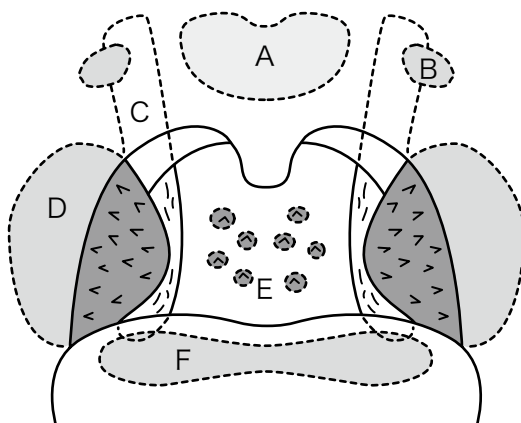
扁桃の表面にはたくさんの凹凸があり、そのくぼみは扁桃の実質内に深く入り込んでいます。このくぼみを陰窩と呼び、陰窩は扁桃の表面に無数に存在しています。扁桃は陰窩

があるために、扁桃全体としての表面積が大きくなっており、細菌をより効率的に殺せるような構造になっています。

扁桃は消化管、気道の入り口にあり、様々な外来性異物や微生物と最初に接する位置にあります。また、扁桃にはリンパ球が集まっており、細菌やウイルスなどの異物を殺します。扁桃はその位置や多数の陰窩をもつ構造から、鼻や口から体内に侵入してくる異物や病原体を捕らえやすくできていると同時に、感染を受けやすい状態にもなっています。免疫機能を果たすと同時に、感染しやすい臓器という、二面性をもっているのです。

扁桃の炎症

扁桃は鼻や口から侵入してきた細菌やウイルスに対して免疫機能をもつと考えられますが、細菌やウイルスとの戦いが激しいと、炎症を起こします。



ワルダイエル扁桃輪

A：咽頭扁桃（アデノイド）

B：耳管扁桃

C：咽頭側索

D：口蓋扁桃

E：咽頭後壁のリンパ小節

F：舌扁桃

■急性扁桃炎

子どもの最もありふれた病気です。高い熱とどのの痛みが特徴で、扁桃は赤く腫れて、表面に白いぶつぶつができます。中学生ではかぜの症状の一部としてみられることが多くなります。

普通の細菌感染による急性扁桃炎であれば、抗生物質や消炎鎮痛剤などを数日間服用することで治ります。なるべく早く耳鼻咽喉科や小児科を受診して、薬が必要な場合は処方してもらいましょう。

■慢性扁桃炎

扁桃炎が慢性化し、慢性扁桃炎となる場合があります。慢性扁桃炎の場合、扁桃炎が習慣的に発症しているかどうかの判断が大切です。年に何回くらい起こすのか、症状の持続期間、発熱・咽頭痛の状況、扁桃周囲炎や扁桃周囲膿瘍を起こしやすいかどうか、学校を何日休まなければいけないかなどを考慮して、扁桃摘出手術をするべきかどうか判断します。耳鼻咽喉科を受診して、医師とよく相談しましょう。

繰り返し起こる扁桃炎も、日常生活上の注意を守ること、ある程度まで防ぐことができます。夜更かしをして睡眠不足にならないよう気をつけ、過労やストレス、受動喫煙を避けるようにしましょう。また、大人の場合は喫煙やアルコールの飲み過ぎを避けるようにします。

■扁桃周囲炎

扁桃炎に抗生物質が効かなかつたり、不十分な治療で扁桃炎がこじれると、炎症が扁桃の皮膜を越えて周囲に広がります。

■扁桃周囲膿瘍

扁桃周囲炎の病状が進展し、扁桃の被膜の外に膿が溜まって大きく腫れる症状です。通常、片側だけに起こります。高熱が出たり、膿瘍が進展すると口も開けにくくなります。咽頭周囲膿瘍が疑われるときは、耳鼻咽喉科

を受診しましょう。

扁桃肥大

10～12歳くらいまでは生理的にも扁桃に肥大があるのが普通です。扁桃は母胎免疫が薄れ、外界からの病原体の侵入が増える2～3歳ころから肥大し始めて、7～8歳ころが最大になります。遺伝的・体質的要因、食生活や栄養状態、感染の繰り返しの有無など、内因性・外因性の多くの要因が扁桃の肥大に関与しています。多くの研究から、免疫機能の完成する5～6歳以上では、扁桃摘出手術による免疫系への影響はないことが分かっています。以下のような扁桃肥大のための症状がひどい時には、手術を考えます。

1. 慢性的な呼吸障害
2. 睡眠障害
3. 嚥下障害
4. 構音障害
5. 扁桃腫瘍

扁桃膿栓

扁桃の表面に開いている無数の小さい穴、陰窩の奥には、細菌の死骸や食べもののカスが溜まってきます。このカスを膿栓と呼びます。

膿栓は健常な人にもよくみられるもので、特に症状が無ければ放置して問題はありません。急性扁桃炎や陰窩性扁桃炎の急性憎悪を繰り返す場合や、扁桃周囲炎や扁桃周囲膿瘍などの重症化を起こしやすい場合、また、慢性扁桃炎、いびきや睡眠時無呼吸症の原因となるような扁桃の肥大があれば、治療が必要になります。

耳鼻咽喉科で膿栓の吸引や、陰窩の洗浄といった処置を受けることができます。また、日常ではうがいを頻繁に行うことが、膿栓の予防になります。